

山形大学人文学部准教授  
山田圭一

人間文化入門総合講義

## 『1Q84』を哲学する！

## 『1Q84』のあらすじ

- × 「青豆」という女性が、仕事に遅れそうになった時に首都高速道路の非常階段を下りると、そこはそれまでの世界（「1984世界」）と微妙に異なった世界（「1Q84世界」）であった・・・。
- × 物語は、この青豆を主人公とした物語と、予備校教師で小説家を志す天吾を主人公とした物語が交互に描かれながら、展開していく。

本講義で考えてみたい場面

BOOK 3 239頁

列車が1駅を出ると、急遽クミの部屋で過ごした夜を思い出した。考まみれば、昨夜のこと。派手なヘアアクセサリーと飾り付いたラヂオ、隣家から聞こえてくるお笑い番組、雑木林のフクロの声、ハシンの機、スエルトマンのツツと、足押つけられる陰、息が起ころうとしたら「目撃してないのに、ずいぶん出来事のように思えた。意識の薄れ感もさうかめない。不安な程のように、その出来事の後は最後までひととらに書き着かなかった。

天吾はと不安になり、あたりをさまよった。これは本物の現実だろうか？ おれはひょっとしてまた間違へ現実へ乗り込んでしまったのではあるまいか？ 彼は近くに、傘を貸して、それが届くまで列車を待たせようとした。大丈夫、間違いない。扉山で東京行きの特急に乗り換えるのである。彼は海辺の駅の手をどしつのである。

239 第12章 「1Q84」 世界のルールが組みあがっている

- × 「天吾はふと不安になり、あたりを見回した。これは本物の現実だろうか？」（『1Q84』Book3, 239頁）

⇒本講義における基本的な問い

- ①現実とは何か？
- ②さらに、「本物の現実」とは何か？

## ライプニッツにおける現実世界と可能世界

- × ライプニッツ（1646-1716）の考えた神の世界創造
- × 神が世界を創る際に従う二つの原理
  - ①矛盾律
  - と
  - ②充足理由律（十分な理由の原理）

## 世界創造の原理①

- ①矛盾律...「Aであり、かつAでない」ということはない、という原理
- × たとえば、「あるバラが赤くて、かつ赤くない」ということは成立不可能
- × 対象でいえば、「四角い三角形」は存在不可能

→矛盾律に反しない限りは、「可能」

## 世界創造の原理②

②充足理由律（十分な理由の原理 principium rationis sufficientis）

...「理由なしには何ももの生じない」という原理

7

神の知性の中には、矛盾律に反しない限りのあらゆる可能性の組み合わせに応じた世界が存在する  
→「可能世界」

W1：山田が大学教員である（P1）、日本の首都は東京である（P2）、...

W2：山田がミュージシャンである（P1）、日本首都は東京である（P2）、...

W3：山田が大学教員である（P1）、日本首都は大阪である（P2）、...

W4：山田がミュージシャンである（P1）、日本首都は大阪である（P2）、...

8

- ・当然、山田は大学教員とミュージシャン以外にも無数の職業に就きうる。
  - ・そして、日本の首都も東京と大阪以外にも無数の候補がありうる。
  - ・さらに、「アメリカ大統領が・・・である」（P3）、「・・・は日本一高い山である」（P4）、等々、組み合わせの要素となる事態も無数にありうる。
- ⇒無限の数の可能世界が存在する  
（但し、「山田が大学教員であり、かつ大学教員でない」という組み合わせが成立している可能世界は存在しない）

9

## 神の世界創造

- × この無数の可能世界のうちから、神の意志によってこの世界が選択され、神の力によって生み出される。
  - ⇒「現実世界」の創造！！
  - × この選択の理由（充足理由律）
  - ⇒この世界が最善であるから（最善説）
- 現実世界の特権化

10

## 神の世界創造

「無数の可能世界」→一つの現実世界

W1：山田が大学教員である（P1）、日本の首都は東京である（P2）

W2：山田がミュージシャンである（P1）、日本首都は東京である（P2）、...

W3：山田が大学教員である（P1）、日本首都は大阪である（P2）、...

W4：山田がミュージシャンである（P1）、日本首都は大阪である（P2）、...

11

Q1、それでは、そもそも「世界」とは何か？  
どこまでが一つの世界なのか？

- × 一般的な世界の同定基準①（同じ一つの世界として認められるための基準）
- ①空間的連続性  
例）
- × <ブラジル、日本、月、ケンタウルス座アルファ星>  
ブラジルと日本との間の距離は... kmである＝空間的な関係にある（空間的に連続している）

12

## Q1、それでは、そもそも「世界」とは何か？ どこまでが一つの世界なのか？

- × 一般的な世界の同定基準②（同じ一つの世界として認められるための基準）

### ②因果的連続性

例)

- ・ 食べ過ぎる（原因）  
→ 腹痛（結果）  
（因果関係）

13

## 先ほどの基準で考えてみると・・・

- × 例)
  - ・ 山田が山形大で大学教員（P1）
  - ・ 山田がギターを練習（P2）
  - ・ 山田が武道館でミュージシャン（P3）
- ① もしも、P1の「山形大」とP3の「武道館」が空間的連続性をもち、
- ② P1、P2とP3が因果的連続性をもつならば、  
⇒ 出来事P1、P2、P3はすべて同じ世界の出来事

14

## それに対して、可能世界同士の関係の場合

- × 世界W1において、山田が山形大で大学教員である（P1）
- × 世界W2において、山田が武道館でミュージシャンしている（P2）
- × P1とP2の間に空間的連続性がなく、かつ、因果的連続性もない  
⇒ P1とP2は異なる世界における出来事であり、W1とW2は異なる世界である。

15

## Q2、では、この世界同定の基準によれば、「1984世界」と「1Q84世界」は別世界？それとも同じ世界？

### 1984世界と1Q84世界との関係

- ① 空間的移動によって移動可能であれば同一世界  
→ 青豆の「はしごを下りる」という移動は？？
- ② 因果的關係は？？  
→ 不明

16

## Q2の回答

- × 1984世界と1Q84世界が別世界と言えるためには、空間的移動とは異なるタイプの「移動」（あるいは「変化」）が認められなければならない。

17

## Q3、では、複数の可能世界のうちのどれが現実世界なのか？

- × 現実性の基準①  
「それまでの世界と連続している世界が現実世界だ！」（連続性の基準）

18



### (1) 夢の世界と目覚めている世界の場合

#### × 出来事の連続性

- ・ふとんで寝ている⇒ふとんで目覚める (A)
- ・ふとんで寝ている⇒月旅行をしている (B)

BよりもAの方が連続性がある  
 ∴先の①の連続性の基準によれば、  
 Aが現実であり、Bが夢である。

19

### (2) 1984世界と1Q84世界の場合

それ以前の世界との連続性が問題となる場面

#### <警官の拳銃の形>

回転式 (リボルバー) ⇒オートマチック  
 (『1Q84』、book1、第三章「変更された  
 いくつかの事実」、64頁)

20

- × 青豆がはしごを下りる以前の世界を「はしご以前世界」とよぶことにすると・・・、

- × はしご以前世界⇒1984世界  
 警官の拳銃はリボルバー⇒リボルバー

- × はしご以前世界⇒1Q84世界  
 警官の拳銃はリボルバー⇒オートマチック

(「青豆は新聞記事はこまめにチェックしている。そんな変更があったら、大きく報道されているはずだ」  
 『1Q84』book1,65頁)

⇒①の連続性の基準によれば、因果的連続性という観点から、**1984世界の方が現実だ**ということになる。  
 ⇒**1Q84世界は「現実ではない」ということになる。**

21

### Q4、本当にそうなのか？

#### (3) 山田が大学教員世界W1と 山田がミュージシャン世界W2の場合

Q、「どちらの世界が現実か」を私は連続性の基準をもとにして判断しているのか？  
 ⇒違う！！

→連続性の有無にかかわらず、「私が今、山形大学で学生の前で哲学の講義をしている」ということは**現実だ!**と言いたくなる。

22

#### × 現実性の基準②

- ・どのような世界であれ、**私がいる世界が「現実」の世界だ!!** (私中心の基準)

23

### (3) 世界W1と世界W2の場合

- × 山田が大学教員である世界 (W1) が現実である (W2は現実ではない)

⇨私がいる世界は山田が大学教員である世界 (W1) である (私はW2にはいない)

→「**現実とは私がいるこの世界である**」(以下、この主張を「現実性の主張」と呼ぶことにする)

24

### ここで、各世界の登場人物を区別してみる

- × 世界W1で大学教員をしている山田を「山田1」、世界W2でミュージシャンをしている山田を「山田2」と名づけるとすると...
- ・私がいる世界は山田が大学教員である世界(W1)である(私はW2にはいない)
- =私は山田1であるが、山田2でない

25

- × しかしながら、このとき、W2世界の山田2も先の「現実性の主張」を行うことができる。

「『現実』とは私がいるこの世界である」と山田1が言う。

「『現実』とは私がいるこの世界である」と山田2が言う。

⇒W1だけでなく、W2も現実世界ということになるのか？

26

### 「現実」と「ここ」の類比

- × 「『ここ』とは私がいるこの場所である」  
⇒この発話は、日本で為されても(i)、ブラジルで為されても(ii)、月で為されても(iii)、常に正しい
- × 「ここ」→iの場合「日本」、iiの場合「ブラジル」、iiiの場合「月」、をそれぞれ指すことになる。
- × 「ここ」とはその語を発する者のいる場所である。(指標詞(indexical)としての「ここ」)  
⇒ここは複数存在する。

27

### 「現実」と「ここ」の類比

- × 「現実」とは、その語を発する者のいる世界である。「現実」という語は「ここ」という語と同様に指標詞である)  
(by D.ルイス(1941-2001))  
→「現実」という語を発話する者の属する世界の数だけ、現実世界が存在することになる
- × 現実世界→W1、W2、W3、...  
⇒現実世界の複数化

28

### D. ルイスの様相実在論(可能世界実在論)

- × それぞれの可能世界は実在する  
⇒それぞれの可能世界はそれぞれの世界の住人(山田1、山田2、山田3)にとって、現実である
- 現実世界の平等化(相対化)  
(本当の「ここ」が存在しないように、  
本当の「現実」も存在しない)

29

### 『1Q84』の場合

- それぞれの世界の住人にとって、その可能世界は現実である。
- × 1Q84世界の住人である青豆(青豆1)にとっては、1Q84世界が現実であり、
- × 1984世界の住人である青豆(青豆2)にとっては、1984世界が現実である。
- 現実世界の平等化(相対化・複数化)  
=どちらの世界も現実だということになる。

30

しかし、本当に1984世界と1Q84世界は平等なのか？

- × やはり違いがある気がする。
- 現実性の基準②を補完する基準が必要となる。

<現実性の基準②' >

- × どのような世界であれ、私の視点から開けている世界は現実世界である。(視点の基準)

31

## 世界W1と世界W2の場合

- × この現実性の基準②' (視点の基準) をもとに考えると...
- × 「私」が世界を体験する視点は、W2世界の山田2の視点ではなく、W1世界の山田1の視点である。
- ⇒ 「私」にとって、W1世界は現実であるが、W2世界は現実ではない。

32

## 『1Q84』の場合

- × 現実性の基準②' (視点の基準) に基づいて、「どの世界が現実世界であるか」を考えてみると...

= 「誰の視点から物語が描かれているか」によって

「誰の視点から世界が開けているか」が決まり、それによってどの世界が現実世界であるかが決定されている！

33

- ・ 1984世界の青豆(青豆2)の視点ではなく、1Q84世界の青豆(青豆1)の視点から物語が描かれる。

⇒ 私が(疑似)体験する世界は、私が青豆2である世界ではなく、私が青豆1である世界になる。

= 私の視点から開けている世界(青豆1世界)の方が「現実世界」である。

34

- ・ 同様に...
- ・ 1984世界の天吾(天吾2)ではなく、1Q84世界の天吾(天吾1)の視点から物語が描かれる。

⇒ 私が(疑似)体験する世界は、私が天吾2である世界ではなく、私が天吾1である世界になる。

= 私の視点から開けている世界(天吾1世界)の方が「現実世界」である。

## 以上の考察からの結論

- × 現実性の基準②+②' (私中心の基準と視点の基準) をとる限り、どんなに「非現実的」と思われるような内容が生じていようとも、私の視点から開けている世界は常に「現実の」世界である！！！！

(「見かけにだまされないように。現実と言うのは常に一つきりです。」

(『1Q84』、book1、27頁)

35



### ここまでの議論のまとめ

- × 現実性の基準①（連続性の基準）をとると、
- × **1984世界が現実であり、1Q84世界は現実ではない**、ということになる  
(世界の内容によって、「どの世界が現実か」が決まる)
- × 現実性の基準②（私中心の基準）だけで考えると、
- × **1984世界も、1Q84世界も、ともに現実である**、ということになる  
(世界の内容にかかわらず、「どの世界も現実」になる)
- × 現実性の基準②に基準②'（視点の基準）を加えると、
- × **1984世界は現実ではなく、1Q84世界が現実である**、ということになる  
(世界の内容にかかわらず、「どの世界が現実か」が決まる)

37

**Q5、それではここまでの議論を踏まえて、最初に挙げた「これは本物の現実だろうか？」という問いはどのような問いとして理解できるだろうか？**

- ・まず、「これは本物の現実だろうか？」という問いにおける「これ」は、私の視点から開かれている「この」世界を指している。
- ・そして、現実性の基準②+②'をとるならば、  
⇒私の視点から開かれている世界は常に**現実である**。

38

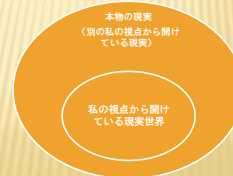
### 「本物の現実」と「本物でない現実」

- × しかし、私の視点から開かれている現実世界が**本物の現実ではない**、という可能性は理解可能であるようにも思われる。

Q、では、この場合に「本物の現実」ということで何が想定されうるのか？

### 私の視点から開けている現実世界が**本物の現実でない**、という可能性

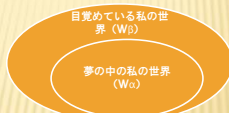
私の視点から開けている現実世界が、別の私の視点から開けている現実(=本物の現実)の一部として含まれるという可能性



40

### 私の視点から開けている現実世界が**本物の現実の一部である**、という可能性①

私の視点から開けている現実世界Wαは、**本当は夢の中の世界**  
⇒**本物の現実世界Wβ**は私が目覚めている世界である

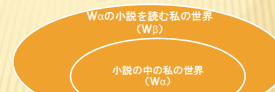


→哲学的な懐疑論(この両世界を、Wαの視点から、どのようにして区別することができるのか?という問いを問題とする=「認識論」)

41

### 私の視点から開けている現実世界が**本物の現実の一部である**、という可能性②

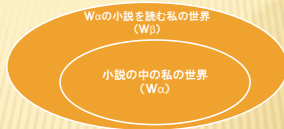
私の視点から開けている現実世界Wαは、**本当は小説の中の世界**であり、  
⇒**本物の現実**は、小説を書いているor読んでいる世界Wβである。



- × 天吾1の視点から開けている世界Wαは、天吾1にとっては世界のすべてであるが、それを読む「私」にとっては世界の一部に過ぎない。
- × 「私」は、天吾1の視点から開けている世界Wαと青豆1の視点から開けている世界Wα'とを交互に体験しながら、現実ではない1Q84世界を「彼らにとって現実の世界」として体験する。

42

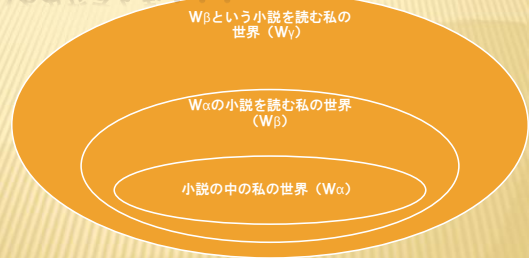
ひょっとしたら、最初に紹介した「これは本物の現実なのか」という天吾くんの問いの中には、この可能性が含まれていたのかもしれない。



そして実際に、彼（天吾くん）は小説を読む「私」にとっては「本物の現実ではない」世界（フィクションの世界）の住人なので、この可能性は現実化されている。

43

でも、ひょっとしたら、私やいま話を聞いているみなさんも・・・



44

## 参照文献

- × 村上春樹、『1Q84』（book1,book3）、新潮社、2009年、2010年。
- × 永井均、『私・今・そして神』、講談社現代新書、2004年。
- × ライプニッツ、『モノドロジー』（清水富雄ほか訳）、中央公論新社、2005年。
- × デイヴィッド・ルイス、『反事実条件法』（吉満昭宏訳）、勁草書房、2007年。

45